
Blue Moon

花桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Moon

【Nコード】

N2819J

【作者名】

花桃

【あらすじ】

一月に二度満月があることをブルームーンと呼ぶそうです。2010年は1月と3月のそんな時期があります。不思議なことが起きるらしいという言い伝えがあるそうです。その短期間に起こった不思議なできごとは一体何だったんだろう。

レクレドール

「ふーん、ブルームーンねえ。」

「何、それ、新種の青いバラのこと？それってすごくキレイだよね。」

「じゃなくって、青い月だよ。」

「あの月のこと？」

赤信号で停止した車のフロントガラス越しに見える、満月。
青くて大きな月の光が、2人を照らす。

なんだか、すごく眩しく感じる今夜の月は。

「月に変わっておしおきよって？セラームーンだったよね。」

「そうそう、セーラー服フェチの康輔にはたまんなかったんだよね。」

「奈美、オレのことバカにしてる？」

「うん。」

運転席から、グーで頭をこつんとされる。
こんな時間がたまらなく好きなんだなあ。

静かなエンジン音を立て、車は動き出す。

流れる景色は、新年一色。

クリスマス気分も抜け、正月へとシフト。

そしてもうすぐバレンタイン。

なんだか日本という国は雑多だ。

「インフルエンザになって仕事禁止になったでしょ？」

「うん、医師の診断が出るまで就労禁止だったよなー。衛生管理者のくせに。」

「それは余分です。その時に、昼ドラなんか見ちゃってね。それでやってたんだよ、ブルームーン。」

「何ってドラマ？」

「Xmasの奇蹟。でね、気になって調べたんだよ。」

「主題歌の韓流歌手？」

「知ってるの？」

「おふくろが大好きだからなあ。」

「ふーん、じゃなくてお月様の話。」

「で、何を調べたの？」

「ブルームーンの時に、流れ星みたいをお願いしたら願いが叶うってこと。」

「で、ゝ、？」

「どうもどこかの国では言い伝えになってるらしい。」

「へえ、そう。」

バカにしたような声で答える。

康輔とは2回目のお正月を迎えた。
そして、もうすぐ40歳。

私、奈美 35歳。

バツイチ8歳の子どもあり。
元夫は仕事中の事故で天国へ。
私が30歳になった年だった。

深夜にトラブル。

緊急呼び出しがあり仕事をし、家に帰る途中のこと。

再び、信号が赤になり停止。

車が動き出した瞬間、奈美のいる助手席に車が突っ込んでくる。
一瞬の出来事だった。

クラッシュ音が静かな街に響き渡る。

「おばあちゃん、おかあさん、遅いね。」

「お仕事、忙しいんだよ、もう寝ようか。」

テレビを消し、子ども部屋へと向かおうとしたときに、電話が鳴る。

ディスプレイは見慣れた康輔のケータイ番号。

「今夜はそのブルームーンなんだよ。ちょっとお願いしようかなあ、」

「来年はサンタさんがプレゼントをくれますようにって?」

「そうそう。」

「それから、正月返上で呼び出しのない生活になりますように・・・なんで正月からＡＴＭ壊れるんだあ?」

「今年は、正月早々ついてなかったよね。あの日も満月だったのしつてる?」

「へー、そうだったの。」

「うん、で今日１月３０日は２回目の満月でブルームーンなんだつて。」

「月の周期は２８日で満ちかけだから、グレゴリオ暦にしたらそん

なのあってもヘンじゃないでしょ。」

「でもいいの、珍しいことなんだから、、お願いしなくちゃ。この男の減らず口を無くしてくださいって。」

「そんなこと言っていると、これあげるのやめちゃうよ。」

私は金の鍵のケータイストラップを手渡された。

「がんばった奈美に、お年玉。」

小さな字で、L e s C l e f s d · O r と刻まれている。

「レクレドール？」

「そう、希望の箱を開く鍵だよ。」

「競走馬の名前じゃないの・・・」

「いいの、いいの、、縁起物だから。」

ストーリーヘヴン

見知らぬ天井、知らない壁。

そしてなんだか懐かしい匂い。
ずうっと前にかいだ匂い。

体が動かない。

「わたし しんでる？」

目をあけるとそこには、太一が私の手を握りしめて座っている。

「目がさめた？」

懐かしいその声が優しくわたしを包み込む。

「たいち？」

「うん。」

「どうしたの？」

「わからないけど、気がついたらここでこうやっておまえの手を握ってた。」

タイムスリップ？

思い出そうとしても頭痛しかない。

康輔の車に乗って、横から車がぶつかってきた。
そこでわたしの記憶は消える。

「康輔は？」

「元気だよ、今は自宅にいるよ。」

「奈美はこれで3日間意識がなくて、ずっと寝てたんだよ。よかったよ、目が覚めて。」

ナースコールをする夫。

看護師と医師が飛んでくる。

「よかったですね、ご主人。」

「はい、おかげさまで。」

「ずっと待っていていらっしゃったかいましたね。」

「はい。ありがとうございました。」

ずっと、ここに？

「太一さあ、確か、葬儀の翌日に私の夢に出てきたよね。体が楽になったから、もう行くよって。」

「そんなこともあったよね。」

「その体はどうしたの？まさか、アンドロイドじゃないよね。」

「奈美、小説の読み過ぎ。まだまだそこまで進化してないよ。SO
NYのASIMOだってあそこまでだろ？」

彼がASIMOを知ってる。

彼が死んだ時って、ASIMO発表されてたっけ・・・

この夫にそっくりな人は一体誰なんだ。

体は火葬にしてこの世にはもうない。

あったとしても数年たてば、それは朽ち果てて原型があるわけない。
そして、当時32歳だった彼が生きてたらこんな感じだというイ
メージのまま。

握りしめた左手の親指の付け根を見る。

間違いなく私がつけたエンピツの差し跡。

結婚する前に、こうやって刺すと跡がつくんだよねってふざけてい
て刺した入れ墨がちゃんとある。

「首筋見せて。」

うなじに連なる3つのほくろ。間違いなく夫、、

康輔の隣で「もう一度太一に会いたい」って願ったことが、叶った？

それってドラマのまんまでしょ？

私がタイムスリップしたのか、彼がしたのか。

これはきつと夢に違いない。

もう一度、目が覚めればきつと元の世界に戻っているだろう。

神様が一瞬だけくれた最後のプレゼントなんだろうな。

・・・ということはわたしはもう死んでいる？

彼の手を握りかえたあの時に、もう天国への入り口にきちゃったんだ。

もうすぐ、走馬燈のような私の半生が、いや一生がリプレイされるんだなあ。

そして花畑かあ。

「ブルームーン」を見ると幸せになれるという言い伝えは言い伝えでしかなかったんだ。

そんなことを考えながら、再び眠りにつく。

チアフルスマイル

再び目が覚めると、さっきとは違う部屋にいる。

「集中治療室を出て一般病室になったんだよ。」

夫の声がする。

顔を見ただけで、私が何を言おうとするのか解るのが夫の特技だ。

間違いなく死んだ夫。

やっぱり死んだのは私なんだ。

左の腕から繋がれたルートは点滴の大袋へとつながる。

1秒に1滴落ちる雨粒。

「先生があんな当たり方をしてたのに、これだけの怪我ですんだのは運がいいとしか言えないって、驚いていたよ。」

私の怪我は左腕の打撲とシートベルトによる胸部及び腹部打撲。

とっても稀なことなんだそうだ。

たまたま、社用車の軽自動車が使えなくて、部長の社用車王冠で出かけたのが幸いしたのかもしれない。

流石、高級車。

相手の信号無視とスピード違反が確定しているため、こちらには落ち度が少なく、事故の処理に関しては保険会社にお任せ。

私は休業補償もしてもらえて、ゆっくり休んでいいということ。

今回の出勤は、本来なら部長が行くはずだったのに、飲酒してしまったということ、たまたま早く連絡ができた私と康輔に命令が出た。

社内恋愛は極秘のことなので、私たちのことは誰も知らない。

会議室でキスしていることも、倉庫でセックスしていることも。

毎日部長が責任を感じて見舞いには来てくれたようだ。

コンコンとドアをノックする。

扉が開き、見慣れた顔が2つ。

康輔と部長だ。

「今起きたところですよ。」

夫が2人に声を掛ける。

「申し訳なかった、、自分が飲んでいなかったら、こんな目に遭わなかったのに。」

「申し訳なかったです。もう少し、早く気がついていればよかったのに。」

深々と頭を下げる2人。

「いいですよ、もう。生きているんだし。」

私がそう声を出す。

康輔が

「ご主人に申し訳なくて、、仲良し夫婦で毎日のろけを聞かされていたんですよ。」

はあ・・・どういこと？

彼が生きてる？死んでない？

ということは私が違う世界にきちゃった？

なんだか理解できないまま、時間が流れる。

窓の外には雪は舞う。

今夜は積もるのかなあと思った夕方、ずっと顔を見せることのなかった子ども 裕太がやってきた。

「おかあさん、、、」

私が寝ている間に何度も来てくれていたのに、顔を見ることができなかった。

声を聞いたとたんに涙が溢れてとまらない。

「よかった、、ずっと心配してたんだよ。」

裕太も布団のシートで涙を拭く。

「ずっと、お父さんと家にいて大変だったんだから。」

「がんばってるんだよな、裕太。」

裕太の頭を撫でる太一。

「冬休みのお手伝い作戦、毎日花丸なんだよ。コメントだってお父さんに書いてもらってるんだから。」

「そうそう、美人の麻衣子先生に”お父さんステキですねー”ってコメント書いてもらっただって裕太ががんばってるんだよな。」

麻衣子先生の存在まで知ってる、この人って。

一体誰なんだ。

そうなっているんだ。

私がねじれた空間に飛び込んだんだろうか。

ぶつかった瞬間にタイムトラベルするラベンダーの香りがあつたんだろうか。

いや、社用車の芳香剤にラベンダーはなかったはず。
今期は、無臭で統一していた。

そうになると、この太一は”ケンソゴル”なんだろうか。

過去に読んだタイムトラベラーまで出てくる過去の文学少女がこんな時に出てくるなんて、、私って余裕？

じゃないよ、、割れそうな頭痛が私を襲う。

点滴の粒が、涙のようだ。

検査の結果、何もないということで2週間の入院で退院できた。

その間に、加害者も見舞いに来たり、警察の問い合わせがあったり、保険関係の書類作成があったりで結構忙しかった。

私の退院の日はバレンタインデー！。

初めての父子家庭ぶりが頼もしくも思える家の中だった。

使ったものが散乱しているであろうと思われたリビングもキッチンもキレイに片付いている。

玄関だって靴も脱ぎっぱなしで散乱していない。

ハムスターのハム太郎ハウスもゴミも食べ残しもない。

「すごいステキな父子家庭だね。お母さんいなくても大丈夫じゃん。

」

「そんなことないよ、ボクお母さんの作ってくれるホットケーキがすごく食べたかったんだから。」

「オレ、どうしても上手に焼けなくて、、」
申し訳なさそうに太一が笑う。

「じゃあ、ホットケーキ作ろうか。」

「大丈夫か？横にならなくて。」

「うん、大丈夫、一週間も横になるなんて今までになかったことだもん。出産の入院よりも退屈だったよ。」

歩行許可をもらった2日前、歩くことの大変さ、自分の足で立つことのうれしさを味わった。

仕事が忙しい時に、盲腸でもいいから入院して休みたいなあと思ったことを今では反省している。

リビングに記録会優勝の写真が飾ってある。

裕太のゴール写真と表彰式後の太一の2ショット。

これって、、合成写真？

太一はもう死んでいるはずなのに。

和室へ行ってみる。

あるはずの遺影もなければ仏壇もない。

どういうこと？

やっぱり私が死んでいる？

ということとは、裕太も？

キッチンでホットケーキミックスを探す。
いつもの棚の所定の場所にちゃんとある。

ここは私の家に間違いない。

食器も何もかも、今までの生活と変わっていない。

出来上がったホットケーキを食べている間に、寝室へ向かう。

クローゼットには太一と私のスペースが、当たり前のようにある。

ノートパソコンを取り出す。

蓋に貼ってあるジオン軍にシール。

シャアのシールもそのまま。

私のパソコンに間違いない。

電源を入れる。

v i s t a が立ち上がる。

パスワードを入力。

【t a i t t i - a i s i t e r u】

これも大丈夫。

秘密の日記を立ち上げる。

結婚してからずっと書いている秘密の日記。

夫の死んだ年のアーカイブを見る。

どこを見ても、その記事が見あたらない。

私たちは楽しい3人家族。

そして私は二人目の子どもを望んでいるのに、なかなかできない夫

婦になっている。

途中で一度妊娠するが、なぜか流産。

ちよつと待て。

この時は、太一死後3年目。

結婚前につきあっていた彼と再びつきあいだして、生理が遅れていた時だ。

しかも妊娠じゃなくて、子宮内膜症だったぞ。

私の過去が、、いや我が家の過去が変わっている。

しかも、私の不在中に誰もこのパソコンにアクセスしたログもなければ、このファイルにアクセスしたログもない。

ということとは、この世界が正しくて私が間違ってきちゃったってこと？

わからない・・・

そうだ、12月31日の日記を読めば何かわかるかも・・・

「2009年12月31日

大晦日だというのに、ATM障害発生のため、部長のかわりに現場へ向かうことになる。今日、復旧できなかつたら正月返上で仕事に、、

こんなことになるんなら、課長昇進断ればよかったよ・・・
上級シスアド、アナリスト 合格するんじゃないよかったよ。」

確かに、これはこの日の日記に間違いない。

「どうしたの？」

太一の声がした瞬間パソコンの電源をオフにした。

「なんでもないよ。」

「おかーさん、はやくこないとアイスクリーム溶けちゃうよ。二つ目の抹茶アイス食べていい？」

マストビートル

夫がいて裕太がいて私がいて、ハム太郎がいる。

これが我が家。

何も変わっていない。

ただ、私が事故にあっただけ。

それだけのことのような。

私としては、あの時無くしたものがすべて帰ってきただけのこと。

ちょっと待て、、、あれから祖母が亡くなっているはずだ。

アイスクリームを食べながら

「太一、、、長野のおばあちゃんち、雪どうだろうね。積もっているのかなあ。」

「そうだね。生きていればきつとすごい雪だよ。裕太に見せてあげたいねって電話してくるんだろうけど。今年の夏は七回忌だよね。」

・・・あつてる。

この男、我が家のことよく知ってる。

「太一、おばあちゃんの名前覚えてる？」

「もちろん、毎年好きじゃないよって言うてるのに、『おやき』送ってくるんだもん。みねさん。」

・・・あつてる。

「この毛糸の靴下、みねばあちゃんが90歳の誕生日プレゼントのお返しに編んでくれたやつだよ。」

そうだ、、太一は冬になると必ずこの靴下をはいていた。

・・・あああああああ、、わからない。

考えるのが面倒になってきた。

とりあえず、普通に生活することに決めた。

親子3人で風呂に入る。

これも太一が生きていた頃、欠かさずしてきたことだ。

裕太が寝てしまっていた時は、二人で毎日一緒にお風呂に入っていた。

これは、姑から密かに頼まれたことでもあった。

「毎日私はお父さんの背中を流しているの。これがケンカしてもすぐに仲直りできる秘訣だから、あなたもやってみてね。」

それが初めて裕太の家に泊まりに行った日に言われたことだった。

結婚前に、お呼ばれしてお泊まりしたときに、一緒に風呂に入るように言われたんだった。

その姑も結婚した年に心筋梗塞で他界した。
結婚2年前に父も亡くなり、その家には兄夫婦がいるだけになってしまった。

背中を流しながらふと思う。
この背中のアザも間違いない。
そしてほくろも。

「どうしたの、人の体じろじろ眺めて、、チェックなんてしなくてもいいよ。浮気なんてしてないから。」

「そんなこと思ってないし。」

「そうだよ、お父さんずっとボクと一緒にいたんだから、どこにも行っていないよ。」

「たく、、こどもの前でなんてことを、、」

「裕太と一緒に風呂入れるのも、あとどれくらいだろうね。」

「そうだなあ、、少なくともオマエはあと1年ぐらいかもしれないな。」

親子3人で入る浴槽はとっても狭い。

物理的にはもう不可能かも。

なんだか、この生活がだんだん本物のような気がしてきた。

私がない間裕太は太一とふたりでダブルベッドで寝ていた。

今日は川の字で三人で寝ることに・・・

裕太が熟睡したことを確認すると、太一が裕太を抱えて子ども部屋へと運んでいった。

太一が戻ってきて冷たい体を布団の中に入れる。

「つめたーい。」

「なみちゃん、あたためてえー」

「何子どもみたいなこと言ってるの。」

私を抱きしめて太一が言う。

「おかえり、なみ。」

「ただいま。」

「ホント、心配してたんだぞ、、よかった、無事帰ってきてくれて。」

優しい懐かしい顔が近づき、頬にキスをする。

そして昔していたように、その唇は私の唇をふさぐ。

間違いない、これは太一のキス。

はじめは照れ隠しのためにほっぺにチュウ。

それから唇に一瞬触れてから、もう一度見つめてから熱いキス。
これが、夜の定番の挨拶。

私と太一しか知らない秘密の挨拶。

日記にも書いたことがない。

ワンモアチャッター

懐かしい腕の中。

ささやきが大きな鼓動に変わるとき

私は母の顔を捨て 女の仮面を投げ捨てて、メスへと進化する。

シーツの海に広がる快樂の汗

ぼんやり深く漂う私

どこまでもどこまで沈んでいける

顔をみつめる視線を感じる

誰かが耳たぶを指でこする。

裕太？

違う、もっと太くて長い指。

私はこの指を知っている。

ずっと何年もこうして耳たぶに触れながら寝付く、大きな大人。

夢じゃない。

太一がいてくれる。

思わず彼に抱きつく。

このまま、ずっとこの時が続くといいな。

時間が止まればいいのに。

アクション

朝が来て、いつものようにコーヒートーストを用意する。

裕太と手を繋ぎ太一は家を出る。

50メートル先にある横断歩道を渡れば、裕太は学校。

太一は渡らずに左へ曲がり、バスに乗る。

相変わらずパンの耳を一边だけ残す太一。

二人を送り出す。

もちろん、太一に行ってらっしやいのキスをする。

裕太に「いいとしてばかじゃないの？」という目で見られても、これだけは譲れない。

ケータイのアラームが8時を告げる。

急がなくちゃ。

スーツに着替え、化粧をしてバス停へを急ぐ。

いつもと同じバス停のメンバーがそこに並ぶ。

メールが届く。

「無理しないで!!」

太一からだ。

いつも鞆の奥底に沈んでしまい、どこでもがさごそ探す私のために太一が選んでくれた皮のストラップをすると引っ張れば、ケータイが浮かび上がってくる。

なんだか元気をもらった気分。

久しぶりの会社。

なんだかドキドキ。

康輔がバス停で待っていてくれている。

「おはよう。」

「おはよう。どうしたの？」

「今日、出社だって聞いていたから、心配で心配で、、、、」

「あなたのせいじゃないのに。」

「いや、、、、でも、、、、」

「いいからいいから。」

実際、一人で会社へ行くのが不安だった。

なんだか少し心強い。

一緒に部長室へ挨拶に行く。

「おはようございます。」と部屋に入り、みんなにあいさつ。

「無理しすぎないように」そんな言葉をたくさんもらう。

なんだか過保護にされすぎて、仕事ができない人扱いっぽい態度がよそよそしく感じる。

たまった書類に目を通す。

パソコンに電源を入れてメールのチェック。

ちゃんと私の代わりに、しっかり応対されている。

今月いっぱい休暇をもらう。

そのための出社。

たくさん書類に署名、捺印。

業務上のことなので労災にするのか、交通事故にするのか、そんな相談も人事を交えて話し合い。

私には不利益がなにもないので、そこはもうお任せモード。

帰り際に部長から声がする。

「復帰してもしばらく定時で帰ってくれよ。」

「はあ？」

「いいか業務命令だから。」

「はい。」

なんだか、時間が止まった気分。

家にいたい私もいるけど、仕事に戻りたい私もいる。

まだ10時。

昨夜の雪は積もらなかったようだ。

どこにも深夜の雪のあとすらない。

遠くの山の山頂が白くそびえる。

吐く息が白い。

冷たくなった手をコートのポケットに入れる。

いついれた手袋だろう、、、、ファアのついた黒い手袋発見。

なんだかうれしい。

サンデーピクニック

そして、自宅に戻り一週間。

何をするということなく家事労働。

子どもの帰宅を待ち、夫の帰りを待つ。

普通の専業主婦の生活。

こんなことは産休、育休以来のことなので何をしていいのかわからない。

そんな日曜日、夫がお弁当を持って海へ行こうと言い出す。

「さむいよ。」

「いいだよ、、たまには冬の海もいいもんだよ。」

一人だけ昨日からそんな気分だったらしく、夜のうちに炊飯器をセツトして早朝からおにぎりを作り、卵焼きを作っていた。

ひとりだけ、行く気満々やん・・・

しゃーないなあという気分に使まれ、家族は動く。

「運転すんのはオレやで ええやんか。」

こんな時だけ、なぜか関西弁になるわけわからんやつ・・・

「どこへ行くの？」

「灯台のあるあそこ。」

そこは私がプロポーズされた場所。

「どうしたの今頃。」

「いや、裕太と一緒に行きたくて。」

白亜の灯台と呼ばれるそこへ行くのは何年ぶりだろう。

海に沿って走る一本道を延々と走り続ける。

はしゃいでいた裕太も温かな振動に揺られすっかり爆睡。

窓を開けると潮の香り。

海の風が車内にながれる。

穏やかな海、どこまでも広がる空。

そんな風景を壊すことなくそびえる白い灯台が微かに見える。

「わあ、、、懐かしい!!!全然変わってない景色。」

「あれ、あるかなあ。」

「あれって？」

「手錠。」

「手錠？」

「ほらあ、、、フェンスにつけたでしょー、奈美ちゃん。」

「ああ、、、あれねー。」

「あつたらすごいねー。」

フェンスに沢山の南京錠がつけられていて、近くにいたカップルに思わず「これなんですか？」と、、、

なんでも離れないようになるおまじないだそうで

車の中を探っていたら出てきたのはオモチャの手錠。

それを渋々つけた太一だった。

「あれで奈美とラブホでSMごっこしたくて用意したのにつて文句いっぱい言ってたよね。」

「そうそう、せっかくのチャンスだったのに、、、SMプレイ。」

子どもがいるのに、何をいつてるんだろこの夫婦、、、

はしゃぐ二人の声に眠りを中断される。

「あー、灯台だー!!」

興奮したの裕太の声に二人は両親の仮面をつける。

小春日和という言葉がぴったりの日曜日。

夫の作った弁当を広げてピクニック気分。

三人で手を繋いで海岸を歩く。

6個の足跡が、海岸に規則正しくつけられる。

夕日を見ながらぼつりとつぶやく。

「よかった、ここに来ることができて、」

砂でトンネルを作る父と子。

そんな風景を見つめる。

当たり前のことなのに涙がこぼれる。

「どうしたの？」

「わかんない、」

「事故にあってから涙腺ゆるんだんじゃない？」

「そうかなあ。」

車から降りるときに、太一がポケットに何かを入れた。

「これ持ってて、」

そっだ、これ何だろう。

ステイルインラブ

ポケットの名刺サイズの封筒を探し当てる。

小さなピンクの封筒。

カード？

封をあけると馬券が3枚。

ステイルインラブ 桜花賞 オークス 秋華賞

私が大好きな幸騎手のお手馬。

三冠馬記念馬券。

今頃、どうしたんだろう。

牝馬三冠はグルーブの娘だっ
て言い張って聞かない私をよそ目に、
彼は勝鞍をあげるたびに、「オレの目に狂いはなかった」と言いた
げに喜んだ。

トンネル作りの手を休め、彼がそんな私に気付く。

「太一、これ、、、」

「あつ、それぞれ、、、ここで渡そうって思ってたんだけどなんだ
か恥ずかしくって。」

「うん。」

「三冠取った日に渡そうって思ってたんだけど、これを添えて。」

「これって？」

小さな小さなパッドロックのついたネックレスを手渡す。

「わあ、ロックだねえ。」

「でしょ、ヘビメタっぽいでしょ。」

「うん、とっても太ーらしい。」

太一が好きだったのは、KISSやVan Halen。
当時もそんな服に身を包み、ちょっと危ない人スタイルでライブに行くのが私たちの基本デート。

「おかーさん、それなあに。」

「えへへ、いいでしょー。もらっちゃった。」

「ずるーい、じぶんばかり。」

「灯台へ行ってみようか。」

走っていく裕太。

手を繋いでぬくもりを感じながら、歩く私。

「ねえ、太一。」

「ん？」

「もしも、あの手錠がなかったら、今もらったばかりだけど、このネックレス、フェンスにつけていてもいい？」

「いいよ。もう絶対に離れないからね。」

「うん、気持ちはもらった。それに、」

「それに？」

「あの馬券だけでいいんだ。ステイルインラブ。still in love まだ惚れてる。ええなあ・・・」

「違うよ、いつまでも愛してる。だって。」

「だよね、、じゃあ、その子ども裕太はジューダかあ。いいなあ、神様に賞賛されるのかあ。」

裕太がいなかったら、ここで絶対にキスしてるのに・・・

と思っていたら、太一が頬にキスをした。

めざとく見つけた裕太が叫ぶ。

「おとーさん、おかーさんにキスしてる、、エッチだなあ。」

ムーンライトタンゴ

ふたりで歩く道。

なんだかもう何年もずっと一緒にいたような気がしてならない。

ブランクなんてきつとないんだろうな。

フェンスにつけられた南京錠を一つずつ見ていく。

「やっぱりないよね、あんなオモチャの手錠。」

「そうだね、鍵もついてなかったし。」

ちよつとがっかりする二人。

「ねー、これ何の意味があるの？」

「こうやって鍵をしていくと、もう離れないだろ？」

「うん。」

「だから大好きな人と離ればなれになりませんようにっていうおまじないだよ。」

「ふーん。」

「大人になったら彼女とまたくるといいな、裕太。」

「じゃあ、ここにお母さんとお父さんと裕太が離ればなれにならないように、お母さん鍵しておくね。」

そう言うと言いつかたばかりのネックレスを外してフェンスにつけようとする。

「ちょっとまって。」

太一がケータイを向ける。

外す前に写真を撮りたかったようだ。

「まずは一人で。」

「裕太、一枚撮って。」

「じゃあ、ふたりでさっきみたいにチューして。」

いいよ、という顔で近寄る太一。

そっとキスをした時に、カシャッというシャッター音。

「ありがとう。」

それから、ポケットからデジカメを出し、三脚をセットして親子3人で記念撮影。

ちゃんとパッドロックも一緒に。

疲れたのか帰りの車内では裕太は爆睡。

「太一、来週の土曜日。」

「何？」

「うん。」

「その日で今年最後の冬の花火なんだよ。」

「あそこ？」

山奥の温泉で開かれている土曜日限定サービス。

裕太の小さい頃、よくいったよね・・・そっいうば。

「予約とれるかなあ。」

「ちよつとケータイで探してみるね。」

「あつたあ。大丈夫。」

ぽちつとな、予約完了。

今年2回目の満月の夜は近い。

もう3月も終わりだというのに雪の残る山道を、スタッドレスタイ

ヤをつけたままのフィットは温泉を目指して走る。

何年ぶりだろう。

旅館にチェックイン。

川沿いの部屋。

窓から対岸の旅館街が見える。

仲居さんがお茶を持って現れる。

昔ながらの着物姿。

いいなあ、ここは。

浴衣にどてらを着て町を歩いても平気な温泉町。

「最近きちんと服着て、靴はいてないと室外へ出られないホテルが増えてきてるけど、やっぱりこういう所は落ち着くよね。」

「奈美、そればあになって証拠じゃないか。」

「いいんだもん、どうせ、、ばあですから。」

「そうそう、けちけちおばだよねー。」

「裕太？」

「ほら、その顔がおばだよ、、」

足湯もいっぱいあるので、下駄を履いて歩き疲れたら足湯につかれば大丈夫。

なんだか、ここだけ時間が止まったような場所だ。

街並みも旅館も変わっていない。

団体のお客様があるということで、夕飯は部屋だしになった。

ちょっと残念な気もするけれど、親子三人水入らずでうれしい。

山奥なのに海の幸、山の幸がふんだんに使われた食事。

夕飯が終わった頃、地響きのような音が聞こえる。

「裕太、花火だよ。」

窓を開けると、そらいっぱい広がる花火。

夏とは違って澄んだ空に音が響く。

「冬の花火もいいよねー。」

「風情があっていいよねえ、、、」

「温泉に入ってみようか。」

大浴場が川に沿って露天風呂になっている。

ひとりでみるのは寂しいけど・・・

お湯に浸りながら、ぼんやり空を見上げる。

ふと不安になる。

あの花火みたいに、私が消えてしまうのか。

それとも、彼が消えてしまうのか。

一体、どうなっているんだろう。

花火の横にぽっかり浮かぶ青い月。

すっかり満月なのに、まだ違う。

満月まであと3日。

満ちていない月に、私は願う。

ずっとこのままでいられますように、、、、

思考回路はショート寸前、、、、

頭の中で歌が回る。

「オレの回路もショート寸前。」

月夜に浮かぶ2つの肌

もう終わったはずなのに　遠くで花火の音がする

大きな大きな打ち上げ花火

川のせせらぎが音を打ち消すように再び流れる

3月30日

今日は病院で検査。

心配だと太一が仕事を休んで付き添ってくれる。

この2ヶ月、彼はとっても優しい。

スティルインラブの馬券は、こっそり結婚式の写真の入った写真立てのウラにいれた。

そして、あの日撮影した灯台の写真も、パッドロックの写真もプリントアウトしてこっそりいれた。

今日は裕太の誕生日。

ケーキを持って母がやってきた。

夕飯後、泊まって欲しいという裕太の願いは聞き入れられず母はどうしても帰らないと行けないからと言つので、家まで送って行くことにした。

実家から帰る道、三人で大きな大きな満月を見る。

「裕太、願い事があつたら流れ星みたいをお願いするんだよ。」

そついう私を運転する太一が笑う。

信号が青だつたので交差点にさしかかると、左からすごい勢いで乗
用車が突っ込んでくる。

なんだか見たことのある、、

そう思った時、後部座席で隣に座る裕太を抱きかかえる私がいた。

クラッシュ音と共に何もかもなくなる。

ドリームジャーニー

目を開けると、そこには見慣れた顔が。

「おばあちゃん、おかあさん起きたよ。」

驚く母が顔をのぞき込む。

そこには康輔の顔もある。

声を出したくても出すことができない。

体が痛くて動かない。

点滴のルートの針が血管はここにあるんだと教えているかのよう
だ。

耳と目だけが生きているんだろうか。

康輔が心配そうに声をかける。

「ずっと寝たままだったから心配したんだ。よかったよ、」

「奈美、、、ごめんよ、、、」

康輔が手を握りしめる。

1月30日に事故にあって、私は意識はあったけどなかなか目が
覚めなくて、、、

一週間、寝たままだったらしい。

そっか、、今までのことは夢だったんだ。

テーブルの上に置かれた、電池切れのケータイには金の鍵がついている。

車は大破だったけど、私も康輔も大丈夫だったし、相手もたいした怪我じゃないらしい。

2月14日 今夜は新月。

何かが始まる予感がする。

「ねえ、裕太。」

「ん？」

「明日、ここに来るときに私の家に寄って写真立て持ってきてくれる？」

「いいけど、、」

「寝室に結婚式の写真飾ってあるでしょ？」

「ミッキーのついたやつ？」

「うん。」

「それ持ってきてくれる？」

「いいけど。」

「どうして？」

「どうしても。」

「わかった。」

翌日裕太が写真立てを持ってきてくれた。

そつとウラを外してみる。

息が止まりそうになった。

ピンクの封筒がある。

封筒の表に懐かしいクセのある文字が、

「still in love 奈美」

涙で文字が読めないよ、、

退院してしばらく退屈な日々が続いた。

3月になり、職場にも復帰した。

彼岸の入りに近づいたある日、キッチンで康輔がリンゴの皮を剥き

ながら言う。

「あのさあ、、、」

「なに？」

「お墓参りに行かないか？」

「だれの？」

「奈美ちゃんの旦那さんの。」

「太一の？」

「うん。」

「一緒に？」

「うん。」

「オレさあ、、、事故ってから考えたんだ。」

「死んだ人には勝てないって思うけど、その気持ちもひっくり返るめてあいさつしたいなって思ってるんだ。」

「だれに？」

「太一さんに。」

「ばか、、、でも、うれしい、、ありがとう。」

って言いたいのにならなくて私はずっと泣くばかり。

もうすぐ、3月30日。

今年2回目のブルームーン。

長い夢の旅の中、気持ちは充分もらったよ。

これから、もう一度幸せになるからね。

急に私たちを置いて、旅に出ちゃった太一が思い残したことを伝えにきたんだよね、、

「康輔、お墓参りに行ったらそのまま海へいかない？白い灯台がみたいんだ。」

ドリームジャーニー（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

ずっと温めていたものを一気に書き綴りました。

思いつきで書いていったので十分なりサーチもなく、辻褄のあつてないこと、整合性のとれていない部分もあります。

充分情景も細かい心理描写も描ききれていないアウトラインだけのような作品です。

競走馬の名前を章のタイトルにして何か書きたいなあと思っていたことがやっとできました。

本当は、ステイルインラブだけだったのですが、それではちょっと寂しいなという思いから、無理矢理色々くっつけてみました。

また、時間がたったら加筆修正しますので、ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2819j/>

Blue Moon

2010年10月9日15時33分発行